

ロンドンの九日間

荒牧 富美江

七月半ばから二週間ほどヨーロッパを旅行

した。西ヨーロッパの放送事情を見ることが第一の目的であった。とくにベルギーは、近隣諸国の放送を再送信するケーブルテレビが普及し、「加入世帯二八〇万、普及率八五%

を超える、ヨーロッパ随一のケーブル網普及

国」ということで関心があった。EC（欧州共同体）本部がおかれているブリュッセルでは、現在、自国の二系統のテレビ——RTBF（フランス語放送）とBRRT（オランダ語放送）の各二チャンネル——のほか、フランス・オランダ・西ドイツ・ルクセンブルグ・イギリス・イタリア諸国のテレビから一々四

系統を再送信し、合計十七チャンネルの放送がケーブルテレビを通してみられている。総人口九八五万余、国土面積三万五百平方キロ余。この小さな静かな国の人々の情報への関

心の強さは驚きである。

放送の詳細については別の機会に譲ることにして、今度の旅行のもう一つの目的は、ロンドンで芝居を観ることであった。

昨年の春、北京・西安・上海の各市をまわって、京劇・地方劇、話劇・児童劇、その他演劇人養成学校などを見学、多彩な中国演劇

研修の旅をすることができたが、そのイギリス版を、ロンドン駐在の友人がお膳立てしてくれたのである。夏の盛りの演劇界はシーズン・オフのはずだと思つたが、最近はアメリカを始め各国からの観光客が多く、切符もとりにくいほどだという。

ロンドンに着いたのは、アンドルー王子とセーラ・ファীগソン嬢との結婚式が行われた十日ほど前であった。バッキンガム宮殿近

くには、ウェストミンスター寺院から馬車で

来られるお二人をとらえるカメラのために足場が仮設され、新聞とテレビは結婚式の話題でもちぎりでである。テレビのモーニングショー

には服飾雑誌の編集長が登場して、ウェディング・ドレスの解説をしていた。日本でも見なれた光景である。外国からの取材陣も押し

かけているらしく、ちらっとTBSの特派員が紹介されていた。しかし、まだ日数がある

せいか、街には特別な飾りもなく、世界一大きなおもちゃ屋といわれる「ハムリーズ」

のショーウィンドウに飾られた、等身大のお二人の人形と、馬に乗られた女王の人形が人

目をひく程度であった。もつとも、式の二日前には、ユニオンジャックの小旗も鮮かに、

街路燈の生花は色どりを増し、横道にはモールのアーチができていた。

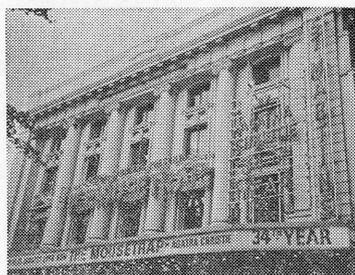
ロンドン三越で『朝日新聞』を買った。一部一ポンド五〇ペンス（約三二六〇円）である。

『タイムズ』が三二ページで二五ペンスだから恐ろしく高い（『朝日』は、この一月から

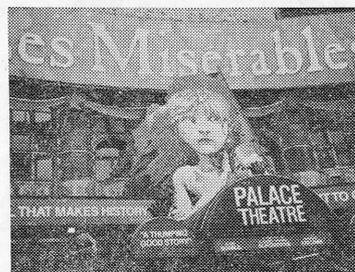
ロンドンで現地印刷してヨーロッパ各地に送っている。パリのホテルでは二フラン、五

二〇円位だったと思ふ）。三越の店員が同情

して「よかつたら昨日のものお持ちになりませ



▲「ねずみとり」
セント・マーティンズ劇場



▲「レ・ミゼラブル」
パレス・シアター

んか」と古新聞をサーベイスしてくれた。日本の観光客は日本からのニュースに飛びつくという評判だが、私もプロ野球オールスター戦の載った古いスポーツ紙を隅々まで読んだ。ところで芝居の方は、セリフ劇二つ、ミュージカル二つ、シェイクスピア二つというメニューである。シェイクスピア劇は、ロンドンのナショナル・シアターや、ロイヤル・シヤイクスピア・カンパニー(略称RSC)の本拠になっているパビカンでも三つ四つ上演していたが、折角だから、シェイクスピアの故郷であるストラトフォード・アポン・エイボンで観るという段取りになっていた。中国でも感じたことだが、言葉が十分に理解できないのにイヤホンなしの芝居を観るの

は、カギ穴から部屋の中をのぞくようにはやい。が、負けおしみをいえば、のぞき見のような楽しみもあるものである。セリフ劇の一つは、アガサ・クリステイの「ねずみとり」、一九五二年以来のロングランで、三四年目に入ったという名物芝居である。さすがは推理小説発祥の地だ。劇場はセント・マーティンズ(写真上)。古めかしい雰囲気、えんじ色のビロード様のカーテンが深々と下りている。客席を見回すと、この名物芝居を一度は観ておかねばという、われわれのようなお上りさんが多いように見受けられた。推理小説ファンでも、そう何回も観にくるわけではないだろうから、世界一ロン

グランの記録はこうしたお客さんによって支えられているのだから、この脚本も邦訳があり、日本でも上演されている。もう一つのセリフ劇は、ニール・サイモンの「思い出のブライトン・ビーチ」。RSCの上演で、劇場はナショナル・シアター。テムズ川の南岸、映画「哀愁」の舞台となったウォータールー橋のたもとにある。サイモンは日本ではお馴染みの作家だが、ナショナル・シアター初登場という。観客は若い人が多かったが、観客の示す反応が、日本語で読んだ戯曲の印象と異なるのにいささかとまどった。アメリカの作家のものはイギリスでも頻繁に上演されているようだが、この作品のように主人公がプロ野球狂などという話は、日本人の方が身近かに感じるのではないだろうか。日本がアメリカ文化圏に属していることを改めて感じさせられた。

一八〇六年からの歴史をもつ劇場、アデルファイのミュージカル「ミイ・アンド・マイガール」は、昨八五年に最も好評だったミュージカル。主役をはじめ芸達者な役者たちのキビキビした動きが小気味よく、へ小芝居の面白さを堪能した。昔懐かしい唄と踊り、宝塚に夢中だった学生時代を思い出した。もう一つのミュージカルは、ロンドンでも新しいミュージカルの「レ・ミゼラブル」劇場はパレス・シアター(写真下)である。ビクトル・ユーゴーの小説の大きかりなミュージカル化ということで評判らしく、八七年には東京でも上演される予定で、すでにオーデ

イションが行われたと新聞にでいた。脚色・演出にはRSCのトレヴァー・ナンが名を連ねている。回り舞台をぐるぐる回して話を進め、市街戦の場面では巨大なバリエードの造り物が現れたり、スケールが大きい。登場人物も多く、皆オペラのように堂々と歌う。その代りダンス・ナンバーはほとんどなく、同行した友人の娘は少々不満そうであった。

さて、あとはストラトフォードのシェイクスピア劇。ロンドンから高速道路をバスで三時間。道の両側は麦畑と牧場のゆるやかなうねりがどこまでも続き、地平の彼方になみは見えない。バスはいくつかの街々を結んでストラトフォードに着く。

まず、マチネーはスワン劇場で「血縁の二公子」(Two Noble Kinsmen)。現在ではシェイクスピアとフレッチャーの合作と考えられている作品で、日本では上演されたことがないようだ。「スワン」は客席四百くらいの小劇場で、長方形に張り出した舞台を客席が取囲み、さらにそのまわりをギャラリーが囲んでいる。ギャラリーの隅には音楽隊が居る。ギリシャのアテネを舞台に展開される物語は天井からゴンドラが降りてくるかと思えば、役者が切り穴に引込んでゆく。裸の舞台の奥

から現れる役者は、どうやら日本のハカマ、カミシモなどからヒントを得たらしい衣装をつけ、日本刀、剣道の竹刀、面などの小道具を携えている。次から次へと意表をつく場面の連続に、長時間バスに揺られた疲れも吹飛んだが、日本人にとって日本趣味いっぱいというのは、何とはなしにはらはらさせられるものである。客席にはバンクスタイルも目立ち、前衛的な演劇青年、もしくは演劇研究者といった人たちが多かったようだ。

マチネーが終り、その夜の宿であるマナーハウス(山荘)に帰って夕食をとる。この山荘はシェイクスピアやベン・ジョンソンも来たことがあるという由緒あるもので、二万坪もありそうな荒れた庭の中に小じんまりとした赤煉瓦の建物が点在、宿泊客はわれわれだけだった。家具・調度もすべていわくありげな広い食堂で、*「ピム」*という女性向の飲物を片手に、芝居のうわさ話をするのはまさにシェイクスピア見物の醍醐味であった。

ソワレは、ロイヤル・シェイクスピア劇場で「ロミオとジュリエット」。ここでも裸の舞台に、いきなり赤いスポーツ・カーやオートバイが現れ、マフィアの抗争が繰り広げられる。「ウェストサイド物語」の世界だが、原

作に忠実に、スピーディに進む。マフィアの一方のボスは黒人の役者。そういえば「血縁の二公子」の片方も黒人の役者で、RSCには黒人のいい役者がいる。最近ではシェイクスピアを現代化する演出はもう珍しくなくなっている。一シーズンに十ちかくもシェイクスピアを上演していれば、何か新しいことをしたくなるのも無理はない。しかし、ストラトフォードにまで来てモダンなシェイクスピアを観るとは。かつての映画やBBCテレビが製作したような*「コスチュームプレイ」*を期待していたので、いささか欲求不満気味だった。

終って表に出ると十二時近く、雲間から顔をのぞかせた半月に、牧草が白々と光っていた。牧場の間の道を車で十分くらい走って山荘に帰ったが、かなり寒かった。絨緞を敷きつめたバスルームの大きなバスタブの横で化粧をおとし、クラシックな高い寝台によじのぼって、慌しく観てきた二つの舞台の印象を反芻しながら眠りについた。

到着の日と出立の日を除くと正味七日間のロンドン。その間に観た六つの芝居、この旅も中国の芝居行脚に劣らぬ内容のある旅になった。

(一九八六・一一・二〇)